

二〇二五年度

豊島岡女子学園中学校

入学試験問題

(一回)

国語

注意事項

- 一. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二. 問題は 一 から 二、2 ページから 22 ページまであります。
合図があつたら確認してください。
- 三. 解答は、すべて指示に従って解答らんに記入してください。

一 次の文章は、鳥類学者である筆者が生物の回転について考えたものです。この文章を読んで、後の一から十までの各問いに答えなさい。(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

近所のスポーツ施設で①ラートを習っていたことがある。ラートはドイツ発祥のスポーツで、ハムスター用の回し車を巨大にして、人間がその輪の中に入ってクルクルと転がるものだ。

(中略)

2014年、ラートの本家とも言えるネズミの回し車に関する論文が発表された。野外に回し車を設置し、野生動物が遊びに来るかどうかを確かめてみたという遊び心満点の研究だ。その結果、野生のネズミがやってきてひとしきり回していくことがわかった。回し車を回しても、食物が得られるわけでもなければ、シンデレラを紹介してもらえないわけでもない。ダイエット目的の可能性も否定はできないが、野生動物はどちらかというと食べて太ることに専心しており、わざわざ痩せては厳しい世界で生きていけない。

さらにこの実験ではカエルやナメクジも遊びに来ていた。その動画はウェブで公開されているので是非見てもらいたい。ナメクジがカタツムリの歩みのごとくゆっくりと回し車を回す姿を見ると、我先にエスカレーターを駆け上る自分が恥ずかしくなる。論文を介してナメクジに寝められた私は、楽しみのために無心に回ることを覚え、ラート教室に通ったわけである。

野生動物の運動は非常に優れており、人類の崇拜の的となってきた。鳥のように飛ぶたい。イルカのように泳ぎたい。ナメケモノのように怠けたい。彼らの洗練された運動能力は常に人間の一步先を行っている。

テクノロジーの世界ではバイオメテックスが注目されている。これは、生物の持つ優れた機能を模倣することで、新たな素材や機構の開発に生かす手法である。たとえば飛行機に乗ると、窓から見える翼の先端が少し上に折れ曲がっている機種がある。これは飛翔時に鳥の翼端がめくれ上がる構造からのインスピレーションでNASAが開発したものだ。

野生の世界では効率の悪さが死に直結する。「②」より運動性能が低ければ食べられてしまい、「③」より運動性能が劣れば食いつぶれる。動物は敵対関係の中で軍拡競争を行い、運動性能を洗練させてきた。長い進化の歴史の中、突然変異により様々な形質が生まれ、効率の悪い個体は死に、効率の良い個体のみが生き残る。何億年もかけてトリアル＆エラーを繰り返し、星の数ほどの実験体の死を積み重ね、機構がブラッシュアップされている。おかげで、わずか25万年の歴史しかない人類では到底及ばぬ知の宝庫ができてゐるのだ。

④にもかかわらず、回転運動である。

一般に前に進む行為には無駄が付きまとう。鳥は翼を羽ばたかせて進む。羽ばたきとは翼を上げては下ろす行為だが、前進に寄与するのは翼を下ろす時のみだ。持ち上げは次に下ろすための準備でしかない。動物が歩行する時は、前に出した足を地につけ、後方に蹴って進む。足を出す間は宙に浮いているため推進力は得られない。クロールもバタフライも一連の動作のうち半分は準備である。実に無駄、無駄無駄無駄、時間を止めて説教したくなるくらい無駄だ。

一方で回転運動はエレガントだ。前進のための行為がそのまま予備動作を兼ねており無駄がない。このため途切れることなく滑らかに前進でき、数ある運動パターンの中でも極めて効率良い運動、すなわち運動オプ運動なのである。

猛スピードのアルマジロが丸まって坂道を直滑降、キツネに追われ雪上をひた走るウサギが転がりながら雪だるま、いずれも想像に難くない。しかしあくまで想像どまりで、野生動物で見られる回転運動はガチャピンのバク転ぐらいしかない。回転という画期的運動が、野生動物では未採用なのだ。

これに対して人間は紀元前から回転運動を利用してきた。その歴史は車輪やろくろという形で古代メソポタミアまで遡るとい

う。人間の発明した機構が自然を上回った瞬間である。《ア》
悔しいことに、回転ほど滑らかな運動は野生動物では極めて稀である。日常では得られないスムーズ感が回転運動に魅力を与え、ナメクジから鳥類学者まで心を鷲掴みにするのだ。

人間は空にものを投げるときにも回転を利用する。ブーメラン、フリスビー、手裏剣、カーブボール。むしろ回転させずに投げの方が難しいくらいだ。回転する物体はジャイロ効果を生じ、安定した軌道で飛ぶ。回転は地上のみならず飛行でも有利な運動なのである。《イ》

鳥類は陸上動物の中でも極めて運動性能が高い。ミズナギドリなんぞは空を飛べば日常的に数百km、海に飛び込めば50m以上潜水可能で、陸を歩かせるよりも以上の穴を掘り営巣する。確かにコウモリは飛ぶし、イルカは泳ぐし、モグラは地に潜る。しかし、コウモリは潜れないし、イルカは飛べないし、モグラは泳げない。陸海空の異なる環境にはそれぞれ異なる運動機構が必要だ。そんな彼らを尻目に⑤三界トライアスロンをやったのけるミズナギドリはタフなアスリートである。ミズナギドリを筆頭に、鳥は多様な環境を利用し様々な運動を操る器用な野生動物である。

⑥最後の希望を懸けて鳥の飛翔に注目して探したが、やはり誰も回っていない。ブーメラン型の翼形を持つアマツバメはもしかろくろくしていないかと期待したが、買い被りであった。唯一見つけたのは、モズが電線にとまり尾を無駄にクルクル回す姿だけである。鳥類原理主義者として無念きわまりない。《ウ》

結局のところ誰も回らない。野生動物はなぜ回転しないのだろう。単に思いつかなかったただだろうか。いや、一億5千万年かけて進化した鳥類に限ってそんなはずはない。ラートで回転しながら私の頭脳もフル回転する。目に映る世界もクルクル回る。回っているのは自分か、それとも世界か。天動説と地動説の狭間で自問自答していた時、灰色の脳細胞が回転運動のデメリットを囁きかけてきた。そう、世界が回るのだ。

鳥は歩きながら首を振る。カモやカモメなど振らない鳥もいるが、話すと長くなるので彼らのことは忘れ、ニワトリやハトが歩く姿を思い浮かべてもらいたい。タカやフクロウなどの捕食者を除き、ほとんどの鳥は目が頭の側方にある。このため、普通に歩くと視界の中で風景が前方から後方に流れて安定しない。《エ》

そこで彼らはまず首を伸ばし、頭の位置を固定した上で体を前に移動させる。体が移動したらまた首を伸ばし、同じ行為を繰り返す。

返す。このことにより、首を動かす一瞬以外は頭の位置が静止し、安定した視界が長時間維持できる。つまり彼らは首を振っていないのではなく、空間に対して頭を固定しているのだ。

鳥類は視覚に頼る動物である。同じく多くの昼行性動物が視覚に頼る。食物の発見でも捕食者の警戒でも、視覚は重要な役割を果たす。しかし回っていると景色が動き続けて視界が安定しない。これでは獲物も捕食者も到底発見できない。いかに運動効率がよくとも、命の危機は採用を見送る大きな根拠となる。彼らは回らなくて当然なのだ。《オ》

とはいえ、本当に回転運動は野生動物に採用されていないのだろうか。例外のない法則はあるのだろうか。もしかしたら、どこかでひっそりとコロコロしているかもしれない。私は野生の回転を求めて旅に出ることにした。

時に岩の割れ目にはさまったダンゴムシに失望し、時にコタツで丸くなるネコを叱咤激励する。しかし回転は見つからない。エレキングの角でもグビラのドリルでもいいから回ってくれ。いっそ怪獣が上陸して明日の会議中止になれ。そんなことを考えながら遊歩道を歩いていた秋のある日、ついにその時がきた。

岩上の一匹のオカヤドカリと目が合う。私に驚いたのか殻の中に体を引っ込める。すると、支えを失った彼は大岩の側面を転がりながら私の視界から消えて行くではないか。ネズミの穴を指すおすびほどの猛スピードである。

ついに見つけた、これこそが野生の回転だ！ 効率のよい回転で日常にない速度を稼ぎ、一気に敵の視界から逃げ去って命の危機を回避する。実に天晴れ、日本晴れ！ 私の旅もようやく終わりだ。ありがとうオカヤドカリ。動物が陸上に進出して約4億年、回転運動はきちんと開発されていたのである！

コロコロコロ……ガチャン！

ぬっ？ 何だ、その岩にぶつかって割れた殻は？ 何だ、その殻を見捨てて逃げていく弱々しい甲殻類は！

後先考えぬ回転により視界から消えたオカヤドカリは、勢い余って岩にぶつかり割れたのだ。仮にも彼らは天然記念物……私は歩いていただけだよな。私が割ったわけじゃないよな。そもそも割れたのは彼らの借宿であって、彼ら本体でもないしな。そうだ

よな。……私は悪くないよな……。

回転運動は絶望的に視界を失う制御不能の無謀運動に過ぎない。⑦野生の回転が進化しなかった理由を目の当たりにし、私の旅は秋風と共に終わりを告げた。

秋空を仰ぐとあのオカヤドカリを思い出す。小さな感傷にひたる私の視界の端で何かがクルクル回転する。イマサラ何だ？それは回りながら宙を舞い落ちてくるカエデの種だった。種子に備わる翼が空気に干渉して回転している。そういえば、熱帯雨林の代表的樹種であるフタバガキ、日本にAジセイするニワウルシ、街路樹に使われるアオギリ、様々な種子が翼を持ち回転しながら落下する。この場合、回転により落下時間が延長され、風でより遠くまでBサンプルされる効果がある。まさか、植物で採用されていたとは恐れ入った。

動物にとって視界を失うデメリットは大き過ぎる。しかし、視覚のない植物には関係ない。カエデは約6千万年前の地層からも出現する。いつから回転していたかは知らないが、人類を凌ぐ長い歴史を持つことは間違いない。⑧回転「運動」という自らの言葉に縛られ、動物に対象を固定して探索していた自分が恥ずかしい。

「⑨」を持つべからず。研究者としてのC心得をすっかり失念していた自分を猛反省である。

(『鳥類学者だからって、鳥が好きだと思ふなよ。』 川上 和人)

(注)

*1 トライアル&エラー——試行錯誤。

*2 ガチャピン——テレビ番組のキャラクターで、運動神経が非常に優れている。

*3 営巣——巣を作ること。

*4 エレキング——回ってくれ——エレキングもグビラも、昔のテレビ番組に登場する架空の怪獣。

問一

―線①「ラートを習っていた」とありますが、本文中で筆者が行っているラートの様子を表した図として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。（ただし、作問の都合上、ラートは一本の太線で表している。）

ア



イ



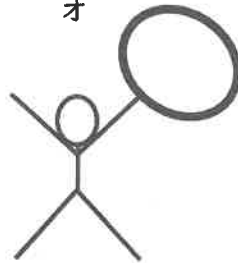
ウ



エ



オ



問二 空らん「②」「③」に入る言葉として最も適当なものを次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 人間

イ 獲物 えもの

ウ 野生動物

エ 鳥類

オ 捕食者 ほしよくしや

問三 — 線④「にもかかわらず、回転運動である」とありますが、この一文の働きを説明したものとして最も適当なものを次のア

イオの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 野生動物は生き残るために何億年もかけて運動の効率を追求してきたのにもかかわらず、運動の中でも特に無駄むだの少ない回転運動が利用されていないことに注目させる働き。

イ 回転運動は野生動物たちの日常には見られない運動であるにもかかわらず、カエルやナメクジに至るまで、回し車を回すのに夢中になってしまふことに注目させる働き。

ウ 野生動物の洗練された運動機構は常に人間の技術の手本になってきたのにもかかわらず、回転運動は人間のほうが先に開発して動物の手本になったことに注目させる働き。

エ 回転運動は非常に効率の良い運動であるにもかかわらず、野生動物たちが生き残るために回転運動を利用するようになったのはつい最近であることに注目させる働き。

オ 野生動物の運動機構は生き残るために作り上げられてきたものであるにもかかわらず、楽しむための回転運動にその運動能力を使っていることに注目させる働き。

問四 — 線⑤「三界トライアスロン」とありますが、それはどのようなことですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間は、技術を用いて空を飛び、海を泳ぎ、回し車も回転させられるということ。

イ ほ乳類の中には空を飛ぶもの、海を泳ぐもの、陸地で過ごすものがあるということ。

ウ ある種の鳥は、陸と海と空のどこでも、その場に応じた運動ができるということ。

エ 鳥類は空を飛び、魚類は水中を泳ぎ、ほ乳類は陸地で生活しているということ。

オ 動物は、飛ぶ・泳ぐ・歩くなど、どれか一つに特化した運動機構を持つということ。

問五 — 線⑥「最後の希望を懸^かけて鳥の飛翔^{ひしょう}に注目して探した」とありますが、ここでの筆者の思いの説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 地上に生きる多くの動物にとって回転は日常的な運動ではないため、飛翔^{ひしょう}というほかの動物にとっては特殊^{とくしゅ}な運動をする

鳥類ならば、回転という非日常な動きもできるのではないかと期待したということ。

イ わずか25万年しか歴史をもたない人類でさえ回転運動を利用しているのだから、野生動物の中でも特に長い歴史を持つ鳥類であれば、回転運動を取り入れているのではないかと期待したということ。

ウ ブーメランなどを回転させるには器用な動きが必要であるため、ほかの動物に比べて多くの運動能力と器用さを持つ鳥類であれば、回転という複雑な運動も可能ではないかと期待したということ。

エ 回転運動は飛行においても安定性を高められるため、ほかの野生動物は回転していないとしても、高い身体能力をもつ鳥類ならば飛翔^{ひしょう}の際に回転を利用しているのではないかと期待したということ。

オ すぐれた身体機能を持つ鳥類は海に潜^{もぐ}ることもあるのだから、これまで観察することができなかった水中で活動中の鳥類であれば、回転運動も見られるのではないかと期待したということ。

問六 —線⑦「野生の回転が進化しなかった理由」とありますが、なぜ野生の回転は進化しなかったのですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日中に活動する多くの動物にとって、食物を得るにも身を守るにも視覚が重要な役割を果たすが、回転運動をすると視界が安定しなくなり、命が危なくなるため。

イ 回転運動は滑らかであるがゆえに他の移動方法に比べて速度が上がりがちで、その急速な変化に野生動物の脳の情報処理が追いつかなくなってしまうため。

ウ 野生動物の運動性能は人間よりはるかに優れているが、車輪やろくろ、ブーメランなどの回転する道具を扱える知能を持つ動物が、人間以外に存在しないため。

エ 回転すると視界がぶれて前後上下の区別がなくなってしまう、着地の際にどちらに地面があるのか判断がつかないために受け身が取れず、身を危険にさらすため。

オ 回転運動はその運動効率の良さから野生動物の身体能力を超えた動きとなってしまう、目が回ってみずからの身体をコントロールできなくなってしまうため。

問七 本文からは、「人間が回転を利用できたのは、自分ではなく道具を転がしたからなのである。」という一文が抜けています。この一文が入るのに最も適当な箇所はどこですか。本文中の《ア》《オ》の中から一つ選び、記号で答えなさい。

問八 —線⑧「回転『運動』という自らの言葉に縛られ」とありますが、ここで筆者はどのようなことを言おうとしていますか。『運動』と表記されていることに注意しながら六十字以内で説明しなさい。

問九 空らん「⑨」に入る言葉として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 優越感 イ 先入観 ウ 生命観 エ 価値観 オ 全能感

問十 ―線 A「ジセイ」・B「サンプ」・C「心得」について、以下のそれぞれの問いに答えなさい。

(1) ―線 A「ジセイ」のカタカナを正しい漢字に直しなさい。

(一画一画でいいいにはっきりと書くこと。)

(2) ―線 B「サンプ」の「サン」に相当する漢字をふくむものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 友人の意見にサンセイする。

イ 昔はヨウサンが盛んだった。

ウ 君の頑固さにはコウサンだ。

エ 地域サンギョウを興したい。

オ 仲間とは駅でカイサンした。

(3) ―線 C「心得」の正しい読みをひらがなで書きなさい。

二 次の文章を読んで、後の一から九までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

一年とおよそ半年前、河原^{かわら}をランニング中、宙を飛んできたバットが後頭部^{ちよくげき}に直撃した日から、夏実^{なつみ}は、Aひとの吐^はく息の色が
たちが目にみえるようになった。

高校の授業中も、街なかを歩いていても、ひとびとの顔の周囲に、色とりどりのビー玉や、らせんをなしてのぼっていく銀色の
棒、マスクからこぼれる極彩色^{ごくさいしき}の破片など、それぞれの吐息^{といき}がありありとみえてくる。

祖母や父によると遺伝^{えん}なのだそうで、そのうち、自分で励^{はげ}んだせいもあり、息をみる能力の出し入れもできるようになって、日
常の暮らしにほとんど影響^{えいぎょう}はなくなった。

高校の三年を、ほぼ陸上の部活一本で過ごしてきた。大学は、中高からのエスカレーターに乗って、通りをはさんで向かい
の大学の文学部に進み、さらに陸上をつづけるつもりでいた。

そんな夏実^{なつみ}が高校を卒業後、B美術予備校にかようことになったのは、複雑な思いやできごとがからまりあって、元来からつと
乾^{かわ}いた心根^{なづみ}の夏実^{なつみ}にも、これが理由、とは単純にひとことでいいきれない。

祖母の口から、

「自分のことは、英国王朝一の鏡でもようわからしまへんわ」

といってもらえたときは①ほっとした。

ただ、さまざまにくつつきあった事情の、ゆるい結び目のような箇所^{かしよ}に、オリンピックの延期騒動^{そうどう}がからんでいることは夏実^{なつみ}も
自覚している。

もともと、ニュースの遠い声、たまに目にするネットの話題でしかなかった。高一の夏に、C短距離^{たんきょり}ハードルで全国三位を記録

したとはいえ、夏実^{なつみ}は、自分の存在を国際大会に関連づけて考えたことは、これまで一度としてなかった。

高二の三学期から、「目^めにめーへんややこしいもん」(祖母)のせいで、全国のあらゆる学校がしゃっくりのような中断を余儀^{よぎ}なくされた。夏実^{なつみ}の高校の陸上部も、毎日の活動は当面むずかしくなった。三年の一学期、夏実^{なつみ}たちは毎日、河原^{かわら}や城のまわりをDたったひとりで、黙々^{もくもく}と走りこんだ。

初夏の簡易合宿から、ようやく部活が再開された。部室の前で、必ず体温を記録する。マスクやバフを着用し、活動中はむだな大声^{かんせい}や、歓声^{かんせい}をあげない。部員の家族に陽性反応が出たなら、部全体の活動は即^{そく}、三日間休止。

プリントに派手なデザインで記された「ソーシャル・ディスタンス」の文字に、ベンチから立ちあがった主将の中上は、「陸上^{りくじょう}で、もともと、距離^{きょり}とれたもん勝ちやんけ」

そうつぶやき、肩^{かた}をすくめ、棒高跳び用のバーをとり倉庫へ走っていった。

その夏、どういうわけか、校内で計測するたび、部員たちの記録はみるみるのびた。入部したての一年から引退をひかえた三年まで、陸上部^{だれ}の誰^{だれ}もが、あらゆる種目でつぎつぎに自己ベストを更新^{こうしん}した。

夏実^{なつみ}とともに、中学から陸上をつづけてきた青海は、うまれてはじめてロングジャンプで5メートル80を跳^とんだあと、

「もし今年、インターハイあたら、うちら、やばかったな」

パン生地のように息をふくらませて笑った。②夏実^{なつみ}も笑った。延期が決まった夏のオリンピックのことは、部内ではまったく話題にのぼらなかった。

年の暮れのE引退式では、泣きじやくる下級生の吐息^{といき}が虹色^{にじいろ}の雲のようにつながって、夏実^{なつみ}を肩^{かた}からくるみこんだ。中高六年分、おびただしい数のデジタル写真が卒業生同士のモバイル間を光速でとびかった。

夕方、家に帰りついても虹色^{にじいろ}の吐息^{といき}はまだ夏実^{なつみ}についてきた。台所では、祖母がすし桶^{おけ}の酢飯^{すめし}をうちわでぱたとあおいでいた。居間のソファに腰^{こし}をひっかけ、夏実^{なつみ}は何の気なしにテレビをつけた。ニュース番組だった。顔と名前は知っている背広の老人

が、細い首をのばして記者会見席にすわり、オリンピックの選手たちは安心してほしいと、洞窟どうくつのような目で語った。吐息といきは目にみえなかった。

父の崇たかしはこの日早めに現場をあがり、ロードレーサー*2のペダルを踏ふんで家にもどってきた。玄関げんかんのハンガーに半纏はんでんをひっかけ、全身に消毒スプレーをふりまきながら、鼻を鳴らして台所をうかがう。ほんとうのところ、夏実なつみの好物である、祖母のばら寿司ずしがさほど好きではない。

祖母は顔をあげず、

「おかえり」

「夏実なつみは」

なにころなく崇たかし。

「テレビみたはんで」

おしだすように祖母。

「ふうん」

手洗いとうがいをすませ居間にはいると、夏実なつみの背が少しふるえている。テレビは消えていた。ソファの隣となりに見なれない虹色にじいろのもわもわが寄り添よそっているのが、父の崇たかしの目にもみてとれた。

はじめは、泣いているのか、と思った。

「お父ちゃん」

夏実なつみはふりむかず、なにかここに決めたような、静かな口調でいった。

「わたし、いま、なんや、めっちゃ腹立はらたってんねんけど」

古い星座盤せいざばんをあてどなくくるくる回している。

「そうなんか」

崇は突っ立ったまま、

「どないしたんや」

「わあらへん。なんや、大きすぎて」

「ふうん」

ほかにもいいいたいことありそうやな、そう思って崇は、しばらく黙ったままでいた。

「わたしな」

と横顔のまま、テーブルに星座盤をぱたんと置き、夏実はいった。

「大学では、もう、陸上はええかな」

「そうか」

「ていうか、お父ちゃんにはなんて謝ったらええかわからへんけど、エスカレーターやのうて、自分でえらんで受験しよと思う。

ごめん」

③ 崇は一瞬、夏実のいいぶんを頭のなかで整理した。

「急なこっちゃな」

「そやねん。ごめん」

「謝ることあるかい」

崇はいった。

「もともと、お前が決めてきて、お前が小六でがんばったんやろ。今度のも、そんなことやないか。お前が生きてくのん、おれは、手伝いしかでけへんわ」

「おおきに、お父ちゃん」

夏実なつみは顔をむけ、

「そんななんいうてくれるて、思てへんかった。うそ、ちょっとは思とった。おおきに」

「ええって、もう」

と崇たかし。

「けど、じっさい、いけんのか。^{*3}入試の時期で、もう、ふた月もあらへんやろ」

④夏実なつみは膝ひざに手を置き、くるりと全身でむきなおった。そうして、深々と頭をさげ、

「わたしにもう一年時間をください」

といった。虹色にじいろのもわもわが夏実なつみの脚あしのそばでいっそう大きくふくらんでいる。

「一年、て」

夏実なつみは顔をあげ、

「高校いってあるあいだは、受験はしいひんくって、高校生として、やっとかなあかんことをやる。やりきって卒業したら、一年間、めっちゃ受験生をやる」

崇たかしはもう一度頭のなかで考えをまわし、

「浪人か」

「浪人ろうにんちゃう。受験生。あ、おんなじか、どっちにせよ。で、さ来年から、大学生」

夏実なつみはまっすぐに崇たかしを見あげ、

「受験生やんのはわたしの勝手やから、勉強のお金は、自分でだします」

「それはどっちでもかまへんけど、メシはうちで食えよ」

「うん。ありがとう」

「なあ、夏実^{なつみ}」

崇^{たかし}はふう、と切り株のような息をつく、

「受験するところ、お前、もう決めたあんのやろ」

といった。

うん、と夏実^{なつみ}はうなずき、

「絵えの大学いく」

「え」

「陸上より先に、中学受験の前、わたしずうっと絵え描^かいとったやん。最近、しょっちゅう思いだすねんか、ひとの息みるたび。三つ子のたましい」⑤「まで、いうことかな」

「女子高生のくせに、おばはんくさいこといふとんなあ」

虹色^{にじいろ}のもわもわが浮^うきあがり、ふたりの間でずうっと溶^とけて消える。なっちゃん、たかしい、おすすい、と、台所から祖母が呼ばわる、生きた木魚のような声^{こゝろか}が廊下からひびく。

夏実^{なつみ}の予備校は、住んでいる街なかから、碁盤^{ごばん}の目の道路を市バスで東へ、つづいて北へ、二十分と少し走った郊外^{こうがい}にある。観光名所がそばになく、市バスはこの街にめずらしく、朝夕いつもだいたいい空いている。森のせまるバス停におりたつと、山の空気がくるぶしにひんやりとからむ。

この日は朝から三時間かけての、木炭^{たん}デッサン講習、モチーフはギリシア女神アルテミスのトルソー^{*4}だった。区立図書館ほどの広さがある画材室の棚に、アポロン、ヘラクレス、アフロディーテら、三十近くの石膏像^{せつこうざう}が並べられてある。鉛筆^{えんぴつ}、木炭、デッサ

ンに力を入れているのは、街なかから少し離れていることも合わせ、夏実がこの予備校を選んだ理由のひとつだった。

といって、夏実の描きかたは、評価がずばぬけてよい色彩構成と基本的に同じ。木炭紙をとめたカルトンをイーゼルに立てかけ、アトリエ中央の女神を凝視しながら、深々と息を吸い、深々と息を吐く。波が寄せるようなそのくりかえしのうちに、マスクのすきまからこぼれる夏実の吐息は、むくむくとふくらみ、たがいに貫入しつつ、ひとかたまりの像となって、夏実の目の前に揺るぎなく浮かぶ。夏実はゆっくりと木炭を動かし、その像を木炭紙の上にうつしていく。

描いている途中、あらわれた像はもうどこへもいかない。描きおえるまでずっと視界の中央にとどまっている。小さく縮めて、別の場所へ持ちこぶこともできる。

チューターや講師がしきりにアドバイスを送っているとおり、多くの学生が、描いているさなか、描くべき絵を自分から見失ってしまう。色彩にせよデッサンにせよ、なにも描かれていない紙の上で、はじめは明確にみえていた色かたちが、紙の上に線が引かれ、絵の具が重ねられていくうち、淡い逃げ水のように遠ざかり、そのうち、どこにも見当たらなくなる。夏実にはそれがなかった。描くべき像は、最初から最後まで、厳然とそこに、目の前にあるのだ。

曲がったことのきらいな夏実は、予備校初日の放課後、⑥自分のしているのはズルではないのか、と教室長の宗に訊ねにいった。宗は笑い、

「それは、きみの、イメージする力がすごい、いうこととちがうか」

「あの」

夏実はまっすぐに見返し、

「イメージ、いうか、想像やのうて、ほんま、すぐそこに見えてるんですけど」

「そうや、絵は、見えるとおりに描くしかないねんて」

と宗はいった。

「等^{どう}伯^{はく}もゴツホも、バスキアも、キム・ホンドも、⑦みんな、ほんまに、そない見えたはった。ぼくも、及^{およ}ばずながら、見えるとおりに描^かこうとしてる。きみは、なんもまちがったあらへんて」

(『息のかたち』 いしい しんじ)

(注)

*1 目にめーへん——目にみえない。

*2 ロードレーサー——ロードレースに用いる自転車。

*3 いけんのんか——いけるのか。

*4 トルソー——頭部や四肢^{しし}のない胴体^{どうたい}だけの彫像^{ちようざう}。

*5 カルトン——デッサンの下敷^{したじ}きとして用いる厚紙。

*6 イーゼル——絵を描^かくときにカンバスや板などを描^かきやすい状態に固定しておくための台。

*7 チューター——学生に個人指導をする者。ここでは、塾^{じゅく}や予備校で講師の管理のもと、学生のサポートや助言を行う者。

問一——線A「ひとの吐^はく息の色かたちが目にみえるようになった」・B「美術予備校にかようことになった」・C「短距離^{たんきょり}ハードルで全国三位を記録した」・D「たったひとり、黙^{もく}々と走りこんだ」・E「引退式」とありますが、それぞれの出来事を起きた順にならびかえたものとして最も適当なものを、次のア～オ中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア C↓A↓B↓D↓E イ A↓C↓D↓B↓E ウ C↓A↓D↓E↓B

エ A↓D↓C↓B↓E オ C↓D↓E↓A↓B

問二 本文中の「吐息」に関する描写についての説明として適当でないものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人の吐く息の色かたちは常時見えるわけではなく、夏実は見たいときに意識的に吐息を見られるようになった。

イ 夏実が人の吐息の色かたちを見ることができるのは遺伝のためだといい、父の祟も吐息を見ることができるといえる。

ウ 人の吐息は人々の個性や生のあり方をあらわしており、夏実たちはそれを見て心情を推し量ることができるといえる。

エ 夏実が見ようとしても吐息が見えない場合は、その人と夏実の関係が途絶えてしまったことを意味する。

オ 夏実は吐息を見ることだけでなく、自分自身が吐く息のあり方をコントロールできるようにしている。

問三 —線①「ほっとした」とありますが、その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 理由なく美術の道を目指していいのか迷っていたところに、未知であるがゆえの面白さの存在を教えてもらったから。

イ 長年やってきた陸上を辞めて美術の道に進む覚悟が決まりきっていないなか、前を向くよう背中を押してもらったから。

ウ 学校生活や部活動が制限され気分が落ちこみ塞ぎこんでいたところに、一気に気が晴れるような金言をもらったから。

エ 大学に進学できるはずなのに、それをふいにした自分を情けなく思っていたところに、慰めの言葉をもらったから。

オ 進路変更した理由を自分でもつかめていないなか、そんな状態の自分を肯定するような言葉をかけてもらったから。

問四 —線②「夏実も笑った」とありますが、ここでの夏実の心情はどのようなものだと思いますか。その説明として最も適当

なもの、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大会が中止となるなかでも、前向きに明るく仲間と部活動ができ、成績がのびていく喜びを味わっている。

イ 仲間が自己ベストを更新したことを素直に嬉しく思い、彼女たちの今後の大会での活躍に期待している。

ウ 仲間と一緒に練習することを通して実力がついたので、かえって大会が中止となった現状に感謝している。

エ 大会が中止となったのに成績を伸ばすことの意味が感じられず、仲間の無邪気さを微笑ましく思っている。

オ 将来的な国際大会出場の可能性についても考えていて、仲間と練習を重ねることにやりがいを感じている。

問五 —線③「崇たかしは一瞬いつしゆん、夏実なつみのいいぶんを頭のなかで整理した」とありますが、ここでの崇たかしの様子の説明として最も適当なもの

を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 夏実なつみの言っていることがあまりにも自分本位であつたために感じてしまった苛立ちいらだを即座そくざに鎮めしずめている。

イ 夏実なつみが言いたいことがあることは察さしていたが、その内容が意外だったので飲みこむのに時間を要している。

ウ 受験まで時間が無い中で夏実なつみが進路変更へんこうしたい理由がわからず、どう反応するのが正解か考えこんでいる。

エ 感情が高ぶっている夏実なつみが何を言うのかと構かまえていたが、思ったより夏実なつみが冷静だったので拍子抜けひょうしゆけしている。

オ あんなに打ちこんできた陸上を辞めるといふ夏実なつみの言葉に驚おどろくあまり、その後の内容が頭に入いってこないでいる。

問六 —線④「夏実なつみは膝ひざに手を置き、くるりと全身でむきなかつた」とありますが、ここでの夏実なつみの様子の説明として最も適当なもの

を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 勉強して一年後に大学に行きたいという思いが真剣しんけんに考えた末のものと伝わるように、居住まいを正している。

イ 父の崇たかしが進路変更へんこうを受け入れてくれたので、一年後の受験も許してくれるという期待から、拳こぶしに力が入っている。

ウ 未来に関わる大切なことを事前に相談をしないで一人で決めたことへの罪悪感から、身体に緊張きんちやうが走っている。

エ 受験を先送りにするうえ進学先が絵の大学であるので、受け入れてもらうのは困難だろうと、腹をくくっている。

オ 自身の将来についての考えを父の崇たかしに受け入れてもらいたい気持ちが強いあまり、思わず前のめりになっている。

問七 空らん「⑤」に入る言葉を漢字一字で答えなさい。

問八 —線⑥「自分のしているのはズルではないのか」とありますが、夏実なつみはなぜ「ズル」だと考えているのですか。七十字以内で説明しなさい。

問九 ―線⑦「みんな、ほんまに、そない見ええはった」とありますが、ここで宗はどのようなことを言おうとしていますか。そ

の説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 著名な画家は、普通の者には見えない世界が見えていたために優れた作品をつくることができたのだということ。
- イ 力のある画家は、見えているものをうつしとることが重要だと、絵を描くことを通して示したのだということ。
- ウ 世界中の優れた画家は、それぞれの作品にあらわれているような世界を、実際に捉えていたのだということ。
- エ 有名な画家は、自分が見えているものを超えた世界の本質を絵にあらわすことに才能を発揮したのだということ。
- オ 歴代の画家たちは、それぞれ特有の個性的な筆づかいで絵を描くことによって名作を残したのだということ。

